

# 白藍塾オリジナル

## 2010入試小論文分析&解答のヒント

2010年3月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・樋口裕一・大原理志・大場秀浩

### ●東大後期・総合科目Ⅲ

第一問は、かなり難しい。ある程度世界史の知識が必要だし、課題文の内容もわかりやすいとは言えない。

課題文は、「ヘロドトスと司馬遷とを対比させた文章」と設問文にあるが、正確には、ヘロドトスが受け継がれなかったギリシアの反歴史的傾向と、司馬遷から始まった中国の歴史的傾向との違いを説明した文章といえるだろう。簡単にまとめると、次のようになる。

「ヘロドトスは、『ヒストリア』を書くにあたって、ペルシア戦争という歴史的事件の原因を批判的に探求し、客観的な知識としての歴史学を完成させた。だが、ギリシアの思想はもともと普遍的な存在に関心に向け、歴史のような不断に変化するものを科学的認識の対象とは考えない傾向があった。そのため、ヘロドトスの歴史学は、その後のギリシアにおいて後継者を持たずに衰退した。一方、中国においては、司馬遷が、不断に変化する世界を弁証法的に捉えるという方法によって諸学を総合しようとした。これは、古代中国に共通の弁証法的な精神に基づいていたので、司馬遷の世界史学は、以後二千年にわたって影響力を持った」

問一は、出題のねらいがきわめて捉えにくい。まず、中国史の知識が必要だ。「ヘロドトスやツキディデスと同時代人であったなら」とは、前五世紀の中国にいたらどうだったか、ということ。司馬遷が実際に『史記』を書いたのは、前二世紀末、つまり秦による中国の統一が前漢に引き継がれて、統一国家としての中国が完成した時代。課題文によれば、そうした国家秩序の完成に寄与するために、司馬遷は諸学の総合の試みとして『史記』を書いた。それに対して、前五世紀の中国は春秋戦国時代であり、諸国家も諸学も分裂・競合していて、統一的な秩序のない時代だった。つまり、そうした統一的秩序のない時代にあつたら、司馬

遷は『史記』のような諸学の総合としての歴史を書けず、特定の学派や分野から見た偏った歴史、断片的な歴史しか書けなかった可能性があるわけだ。そうしたことを説明するしかないだろう。

いずれにせよ、この問題に的確に答えられる受験生はきわめて少ないはずなので、手に負えないと思ったら、さっさとあきらめるほうがよい。

問二は、「古代中国においては世界史が成立しえたが、ギリシアの歴史家にとっては、世界史はおろかギリシア史といったものも存在しなかった」と考えられる理由を説明することが求められている。字数は多いが、これは小論文ではなくて説明問題だ。とは言え、課題文の内容を使うだけでは説明できない。課題文に示されている中国とギリシアの考え方の違いを踏まえた上で、世界史の知識で補って、自分なりに考える必要がある。

課題文では、古代中国の弁証法的世界観が説明されている。世界は矛盾する要因をはらみながら不断に変化する実体である、とする考え方だ。古代中国では、春秋戦国時代から秦・漢の時代にかけて、諸国家が分裂と統合を繰り返しながら、統一国家を形成した。また、いったん形成された統一国家も、次々に王朝が交替した。このような歴史を背景にして、不断に変化する実体として世界を捉えることで、初めて「世界史」の考え方が可能になると考えられる。

それに対して、ギリシアの思想は反歴史的で、変化を否定し、永遠に変わらないものに関心を向けるとされている。古代ギリシアは都市国家（ポリス）の集合体であって、各ポリスは自立した小国家として捉えられる。各ポリスがお互いに競合しながらギリシアという統一国家をめざすという意識は弱かった。つまり、世界どころか「ギリシア」というまとまりさえほとんど意識されなかったわけだ。「世界史はおろかギリシア史といったものも存在しなかった」というのは、そのことを指すのだろう。そうしたことを説明するとよいはずだ。

基本型Bを使って、古代中国の考え方とギリシアの考え方をそれぞれ説明した上で、最後にそれらを踏まえて、古代中国では世界史が成立して古代ギリシアではギリシア史すら成立しない理由を簡潔に説明すれば、うまくまとまるだろう。

第二問の課題文は、平和の概念をめぐる書かれた文章。課題文自体はそれほど難しい文章ではないが、何が問題になっているのかはわかりにくいかもしれない。

問一は、福田恒存、「平和学」、著者（加藤尚武）三者の立場それぞれの異同、つまり共通点と対立点を説明することが求められている。これは、課題文の要約問題に近い。

簡単にまとめると、福田恒存は、「平和とは戦争がないという消極的な状態にすぎず、それ自体は価値を持たない。生命に替えても守りたいもの、つまり民族の文化的価値こそを積極的な価値として守るべきだ」と主張する（著者は、これをナショナリズムの考え方としている）。一方、平和学の立場では、「発展途上国などの貧困な国では、戦争がなくても平和とは言えない。したがって、戦争の不在という消極的平和ではなく、戦争、貧困、人権侵害などのすべてを克服して社会正義を実現する積極的平和を追求するべきだ」とする。それらに対して、著者はそもそも戦争の不在を消極的なものとみなす考え方を否定し、平和に生きること、そしてそのための努力をすることそれ自体を価値のあるものとしている。

つまり、福田と平和学は、戦争の不在としての平和を消極的な価値しかないものとした上

で、前者は民族の文化的価値を、後者は社会正義の実現としての「積極的平和」をめざすように主張しているのに対して、著者は、そもそも「戦争の不在」としての平和そのものに積極的な価値があると考えているわけだ。

基本型Bを使って、三者の考え方をそれぞれ説明した上で、最後に三者の異同をまとめると、うまくいっだろう。

問二は、平和について自分の見解を述べるのが求められている。とはいえ、独自の見解を述べるのは難しいので、福田、平和学、著者の三者の考えのどれかに賛成するのが書きやすいだろう。最初に自分がどの見解に賛成するかをずばり示し、第二段落の「確かに～」の部分で他の二つの見解に触れることで、「三つの立場の是非を比較検討」したことになるはずだ。

福田の立場に立つ場合、著者の暗に批判するナショナリズム的な部分に反応して、「国を守ることが大事」などと論じて、もちろん説得力はない。この場合は、「平和であること自体には価値はない。平和を支えている文化的・精神的な価値をもっと重視すべきだ」といった論が可能だろう。平和学の立場に立つ場合は、「民主主義においては、人権の保障や平等を実現してこそ、平和の意味がある」「一国の平和ではなく、国際平和を実現することが重要。そのためには、貧困や人権侵害などを積極的に克服していく必要がある」などの論が可能。著者の立場に立つ場合は、「平和であることに積極的な価値を認めてこそ、それを実現するための様々な努力が正当化される。消極的な平和を否定する論理は、戦争の容認につながる危険がある」「平和に生きることの価値を否定することは、人々の日常的な営みを軽視することにつながる。人々が平和な日常を生きる権利を認めることが、民主主義の根本的な理念だ」などの論じ方ができるだろう。

◎執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179)  
<http://www.hakuranjuku.co.jp>